

平成十九年度

## 問題冊子

教	科	科	目	ページ数
国	語	国	語	13

監督者の「始め」という指示があるまで、問題冊子を開かないこと。

### 解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

### 注意事項

1. 監督者の「始め」の指示の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

## 〔1〕

次の文章は、柳田國男が昭和十六年に著した「涕泣史談」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

① 言葉さえあれば、人生のすべての用は足りるという過信は行きわたり、人は一般に口達者になった。もとは百語と続けた話を、一生涯せずに終つた人間が、総国民の九割以上もいて、今日いうところの無口とはまるで程度を異にしていた。それに比べると当世は全部がおしゃべりといつてもよいのである。その人たちは最初から、泣かずにすむだけの言語表現法が、ちゃんと人生には備わっているもののごとく信頼しきつていて、猫も杓子もこの方を役立てようと努める。しかも実際においては、単語の選択、文句の組上げ方がまだ少しも適切とは言えないのである。まずいちばんに多いのは、かつて誰かの言ったことを覚えていて、ちょうど同一の状態でもない場合にも、できるだけそれを使つてみようとする。かりによく似た気持を現わす場合だけに真似るとしても、あまり毎度同じことを言えば、聴く人に対する効果が鈍くなる、ということをおもつとも顧慮しない。ただこういう場合にはこういうのだと教えてもらつて、それを覚えていて使うのでは、腹から出た言葉とはちがつて、気が乗らず情が映らぬことも確かである。現在の国語教授法の、これが一つの弱点である。しかも多くの人は小学校以外に、言葉の手法を授けられる機会をもっていないので、人間の言葉というものはこれより他にはないのだとあきらめて、みんな不自由を忍んでいるのである。

② きまり文句に強い印象があるはずはない。お蔭で聴き手の方としては、言外の意味を汲まねばならぬのだ、目つき顔つきから人の心を察し得ぬ者はとんまたのと、このごろでは余計な厄介な我々の負担がふえてきた。いつそ手取早く泣いてもらつた方が、よつぽどありがたいのと思うときもしばしばあるわけである。一方本人の立場から見ても、泣いてわめいた方がずっと容易に、お互いの意思を疎通させ得る場合が多いのに、たいていはそれをまだ心付かずにいるのである。それゆえに我々は、まず一応はこの変遷を促した原因、さらに進んでは泣くには及ばぬ条件が、果して備わっているかどうかを、考えてみる必要がある。人が泣かなくなつたという事実はたしかでも、それだけではまだ文化が進み、言語の利用が完備した結果と、推定してしまえない場合が時々はあるからである。

自分などの見たところでは、人が手放してワアワア泣くことを、さも悪徳なるかのごとく言い出したのは、これもまた中世以後の変遷であろうと思つてゐる。やたらに泣くことはもちろん無反省であり、偉人豪傑は喜怒色に表われずなどと、この自己(注1)検束の普通を超えている点を尊敬せられていたが、しかし彼等とても大きな衝動があれば泣いていた。まして常人はなおさらの事で、現に武家生活を中心とした義太夫の浄瑠璃(注2)などを聴いていても、たびたび慟哭(注3)の聲が物語の中にまじつていて、感動の極まるところはいつもこれに帰着することになつてゐる。これが総括的に社交界から排斥せられたのは、むしろ濫用の弊があつたからだとも見られる。濫用をすれば何だつて嫌われる。つまりはこの表現法があまりにも有効であるゆえに、女や子供が挙つてこれを武器とするようになり、一方受け身の方でも神経が鋭敏になつて、もうこれを聴いているに堪えなくなつたために、必要上だんだんにこれを抑圧する傾向が加わつてきたのである。しかし他にもまた一つの原因がたしかに手伝つていた。我々がこのようにまで泣くということを気に掛け出したのは、一には学問の結果といふことができる。日本人の学問は読書が主であつて、読書は実は漢語の対訳(注4)を出発点としていた。人が泣くのは内にカナシミがあるためといふことは、昔からの常識であつたであろうが、そのカナシミという日本語に、漢字の悲または哀の字を宛つべきものとしたのは学問である。カナシという国語の古代の用法、また現存多くの地方の方言の用例に、少しく注意して見れば判ることであるが、カナシ、カナシムはもと単に感動の最も切なる場合を表わす言葉で、必ずしも悲や哀のような不幸な刺戟(注5)には限らなかつたので、ただ人生のカナシミには、不幸にしてそんなものがやや多かつただけである。我々の心持または物の考え方が進んでくると、そんな昔のままの概括的の言葉では、個々の場合を言い現わし足りないのです、次第に単語の内容が狭く限定せられ、従つてその用語が地方的に分化して行つたのである。だから東北の田舎では、今でも通例「孫がかなしい」というように、大昔の「かなし子」または「このかなしきを」とに立てめや(注2)も「などと同じ意味に、すなわち標準語のいわゆるカワイイの代りにこれを用いてゐるのである。カワイイは古い語ではない。多分は「顔はゆい」からであろうといふことで、中世の用法ではフビンナまたは見るに忍びぬを意味し、それが一転しては子供とか女とか、自分より弱い者への愛情だけに限られることになつてゐる。カナシとは少なくとも起こりが別なのである。それから北陸地方または静岡県の一部などでは、このカナシイを恥かしい、きまりが悪いの意味に使う処もある。東京周囲の俗語では

また一つ、カナシイを手がつめたくて性がなくなつたというような時の形容詞にもしている。小さい児などはそういうカナシイにもよく泣くので混同せられているが、この感覚もまた決して「悲」ではない。元は一般に身に沁み透るような強い感覚がカナシイで、その中から悲哀のカナシイだけを取り分けて、標準語の内容としたのは中世以後、この悲という漢字を最も多く需要した仏教の文学や説教がもとかと思われる。

ともかくも泣くことをごとごとく人間の不幸の表示として、忌み嫌いまたは聴くまいとしたことは、全くこの「かなしみ」という語の漢訳の誤りがもとであつた。現に悦び極まつてのうれし泣きというのがあり、またはそれほどなくとも、憤<sup>④</sup>つたり恨んだり悔いたり自ら責めたり、その他いろいろの激情の、はつきりと名をつけ言葉を設けることのできぬもののためにも、人間は泣いている。むしろ適当な言語表現がまだ間に合わぬがゆえに、この特殊な泣くという表現法を用意していたので、それで相手に気持が通ずるならば、実は調法と言つてもよかつたのである。むやみに抑圧せず<sup>④</sup>に、ただ濫用だけを防ぐように教育すればよかつたにと、私などは思つている。そうでなければその感情の一つ一つを、適切に表わす代りの言葉を与えるべきであつた。

〔注〕 1 検束——抑制して自由を制限すること 2 とに立てめやも——外に立たせておくなんてできましようか

問一 傍線部⑦⑧の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①で筆者が「過信」といつているのはなぜか。その理由を本文の内容から考えて説明せよ。

問三 傍線部②とあるが、筆者は、「きまり文句」を用いて起こる弊害について、それ自体が「強い印象」をもたらさないことその他にどのような事柄をあげているのか説明せよ。

問四 筆者は、傍線部③「この変遷を促した原因」とは何であつたと考えているのか、具体的に説明せよ。

問五 傍線部④とあるが、「泣く」という表現法を「むやみに抑圧」することと、「濫用」することは、それぞれどのような弊害をもたらすと筆者は考えているのか。わかりやすく説明せよ。

## 〔2〕

病院で余命三ヶ月の宣告を受けた俊治は、小学校のときに育った海辺の商店街にやってきた。次の文章は、俊治が小学校の思い出を回想し、海を見つめている場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

誰のせいでもない。いまならわかる。事故というものは、すべての巡り合わせが悪い方向に集まってしまったときに起きてしまう。そのうちのほんの一つでも別の動き方をしていたなら事故は起きなかつたはずだし、だから逆に、事故の原因をどれか一つに絞ることもできない。

小学四年生の夏休みだった。八月の終わり——日付は忘れてしまったが、ちょうどいま頃だった。

同級生のオカちゃんが海で溺<sup>おぼ</sup>れて死んだ。一人で『かもめ海水浴場』に泳ぎに来て、波に呑<sup>の</sup>まれた。

目撃者はいない。何日かソウサク<sup>⑦</sup>しても、遺体は見つからなかつた。「あいつ、ほんとは家出したんじゃないのか？」と石川たちは万に一つの可能性にすぎるように震える声で笑っていたが、『かもめハウス』の裏に停めてあつた自転車と、陽に当たつて熱くならないよう裏返して砂浜に置いたゴム草履と、波で打ち上げられた水中眼鏡——そして、その日の昼間「かもめに行こうぜ」とオカちゃんに誘われた、という俊治の言葉が決め手になつて、オカちゃんは行方不明のまま、二学期が始まつてしばらくたつた頃、小さな葬儀が営まれたのだった。

運が悪かつた。その日は四国に台風が近づいていた影響で波がうねつていて、オカちゃん以外の海水浴客は誰もいなかった。もともとお盆を過ぎるとクラゲが出るせいで、子どもたちの足も遠のいてしまう。八月の終わりになつても泳ぎたがるのはよほど海の好きな子どもで——オカちゃんも、その一人だった。

オカちゃんの姿を最後に見たのは、『かもめハウス』のばあさんだった。昼過ぎに店に鍵を掛けて、食事を取りに家に帰つた。そのときにはオカちゃんは波打ち際で遊んでいた。小一時間ほどして海岸に戻つてくると、オカちゃんはもういなかった。犬が鎖を引きちぎるような勢いで吠えていたらしい。だが、ばあさんは、一人で遊んでいてもつまらないから帰つたのだろうと早合点してしまい、店の裏に停めたオカちゃんの自転車に気づいたときには、すでに陽は暮れかかっていた。

ふだんは音のひずんだ歌謡曲が流れているスピーカーから、緊急用のサイレンの音が響き渡った。

俊治もその音を聞いた。自分の部屋で、夏休みの工作の宿題を仕上げているところだった。オカちゃんとは特に仲が良かったというわけではない。海に誘われたときも「石川たち、みんな留守なんだよ。しょうがないから、シユン、一緒に行こうぜ」という言い方にムツとして、「今日は工作の宿題するから」と断って、それがオカちゃんとの最後の別れになってしまった。

運が悪かった。誰のせいでもない。その運の悪さは、かもめ海水浴場で遊んでいた子どもなら誰にでも起こりうることで、またま巡り合わせでオカちゃんに「当たり」が来てしまったというだけなのだ。

おとなになれば、そんなふうになんか納得することができる。<sup>①</sup>数学の理屈で人生の割り切れなさをねじ伏せて、しょうがないさ、と無理やりにでもうなずいてしまえる。

だが、子どもの頃はそういうわけにはいかなかった。しょうがないんだと受け容れる前に、理屈が通ろうと通るまいとなにかや誰かのせいにしてしまわないと気がすまない。

オカちゃんの葬儀にクラス全員で参列した帰り道、俊治は石川に肩を後ろからつかまれ、振り向いたところをいきなり殴られた。「オカちゃんに誘われたのに、なんで一緒に行かなかったんだよ。もう一人いたら、あいつ、助かってたよ、絶対」

石川の目は真っ赤に染まっていた。その後ろに従う数人の男子の目も赤かった。

勝手なことを言うなよ、と俊治も怒って石川に詰め寄った。おまえらが留守だったからいけないんじゃないか——そう言い返す前に、石川にまた殴られた。

「俺らは家にいなかったんだ。もし家にいたら、絶対に一緒に行ってる。でも、シユンは家にいて、オカちゃんに誘われたのに、断ったんじゃないかよ。おまえのほうが罪が重いんだよ」

罪——という言葉が、耳ではなく胸に刺さった。

「おまえ、ひどいよ」

ひどいよ——。

背筋を冷たいものが、すうっと滑り落ちていった。

あらかじめ話を決めていたのだろう、まわりの連中も口々に「シユンのせいでオカちゃんが死んじゃったんだよ」「殺人犯だよ」「オカちゃん、天国で怒ってるよ」と俊治を責め立てた。

女子の誰かが言いつけたのか、担任の先生がケツソウを変えて駆け寄ってきて、「くだらんことを言うな！」と石川の頬に平手を張った。

一緒にいた男子は全員、先生にゲンコツをくらわされて、俊治に謝った。

だが、石川は最後まで謝らなかつた。嗚咽をこらえながら、顎を引き、唇を噛みしめて、じつと俊治をにらみつけていた。

俊治も謝ってほしいとは思わなかつた。「ひとごころし」と呼ばれた自分の悲しさよりも、石川が胸に抱いた悔しさのほうが、くつきりと伝わってくる。巡り合わせがほんの少しずれて立場が入れ替わっていたなら、石川はきつと自分自身を「ひとごころし」と責めるだろう。それがわかるから、石川の詫びの言葉など聞きたくなかつた。

海岸はすっかり形を変えていた。アンツーカーのブロックが敷き詰められた広場を中心に、遊歩道がキカガク模様に波打ち際まで延びている。波の形を模したモニュメントが砂浜から突き出たようにいくつも置かれ、かつて『かもめハウス』があつた場所は、公衆トイレになつて——白い壁は暴走族のスプレーの落書きで埋め尽くされている。

遊歩道を歩き、海にいちばん近いベンチに腰を下ろした。打ち寄せては引いていく波をぼんやりと見つめ、西に少しずつ傾いていく陽差しを浴びていると、「永遠」や「無限」というものが、言葉だけの世界ではなく、実感として体と心に染みってくる。

時間は永遠に流れる。過去も未来も無限につづく時の流れの中で、自分の人生は四十二年前に不意に始まり、そして間もなく、不意に終わってしまう。

気の遠くなるほど長い旅路を往く列車に、途中の駅で乗り込み、途中の駅で降りる客のようなもの——いや、それより、小学三年生の四月にやつて来て、四年生の三月に去っていく転校生になぞらえたほうがわかりやすいだろうか……。

もう終わりなのか——。

こんなところで、俺の人生は断ち切られてしまうのか――。

つぶやいて、首をかしげた。胸をえぐられるような痛みや苦しみがほとんどののが不思議だった。

検査の結果が出るまでに、さんざんつぶやいてきたせいだろうか。すでに答え合わせのすんだテストの答案用紙を、今日はまだ受け取っただけ、という気もする。

昨日までの一週間のほうが、ずっと苦しみは深かった。「腫瘍は良性のものだった」「悪性だったが切れば治る」という希望が残っていたぶん、よけいに。

明日からは、体の苦痛にさいなまれることが増えるだろう。一日ずつ近づいてくる死の瞬間への恐怖に押しつぶされてしまうこともあるはずだ。

その狭間の今日は、ほんとうに、拍子抜けしてしまいそうなほど静かで穏やかな心持ちだった。「晩年」をこんなふう始めることができるのは、そもそも「晩年」の始まりを意識できることは、なによりの幸せではないのか？

昨日まではかけらほども思う余裕はなく、明日からはきつと「なにをのんきなことを言ってたんだ」と恨めしく思うはずのことが、今日はすんなりと受け容れられる。

ウインチでコースの頂点まで引き上げられたジェットコースターが、降下を始める寸前に一瞬静止するような――今日は、そんな一日なのかもしれない。

波は浜辺の手前で白く砕け、砂浜に広がって、また引いていく。海に戻る波もあれば、波打ち際の砂に染み込む波もある。濡れて色が濃くなった砂には、海に帰れなかった波がいつたいたいどれくらい染み込んでいるのだろう。

潮騒には二つの音が交じり合っているんだと、あらためて気づく。海のすぐそばまで来ないとわからないことだ。波が砕けて広がり、引いていくときの大きな音と、砂に染み込むときの、さあーっ、という小さな音。この海で泳いでいた頃は、二つの音を区別することなく聞いていた。海から遠い町で暮らすようになってからは、潮騒といえは波が打ち寄せて引いていく音だけだった。<sup>③</sup>いまは、波が砂に染みる音のほうに耳の奥深くまで届く。

「すつと、ここに座つてたのか？」

石川はベンチの隣に座ると、コンビニエンスストアの袋から出した缶ビールを俊治に差し出した。「いくら待つても帰つてこないから、ちよつと心配になつちやつてさ」と苦笑して、自分のビールの栓を開ける。

陽はだいぶ西に傾いていたが、まだ夕方と呼ぶには早すぎる時間だった。「店のほう、いいのか？」と俊治が訊くと、石川は喉を鳴らしてビールを飲み、小さなげっぷをして、「どうせ暇だしな」と言った。

十年ほど前に線路をひとまたぎするバイパスができて以来、駅の向こう側の大型ショッピングセンターに客を奪われて、商店街はさびれる一方なのだという。

「アーケードがよくないんだ、なんか陰気な感じがしちゃうだろ。昼間でも電気を点けなきゃ薄暗いし、電気代だつてバカにならないし……思いきつてテッキョ<sup>㊦</sup>しちゃうかつて話してるんだけど、取り壊しにも金がかかるだろ、それがなかなか出せなくてさ」

昔は逆だった。アーケードのあることが商店街の自慢で、雨や土埃<sup>ちまけ</sup>とは無縁のアーケードの中に入ると、客のほうも、なんだか未来の町に足を踏み入れたようにわくわくしていたものだった。

「俺、覚えてるよ、アーケードができたときのこと」と俊治は言った。四年生の秋だった。商店街をあげて大がかりなバーゲンセールがおこなわれ、福引きもあつたし、祭りの御輿<sup>みこし</sup>も出たし、特設ステージではデビューしたてのアイドル歌手のミニコンサートも開かれた。

石川は「あつたあつた」と笑つて、「一緒に金魚すくいやったんだよな、あのとき」と懐かしそうにつづけ、もう一度「あつたあつた」とうなずいた。

俊治はあいまいにうなずいてビールをすすつた。石川の記憶違いだった。あの日、俊治は両親と一緒に商店街に出かけ、ヨー釣りをしたのだった。

だが、ここで「違うよ」と言うのもヤボな気がして、まあいいや、と受け流した。正しかろうと間違つていようと、この町で過

ごしたほんの二年間のことが誰かの記憶に残っている、それだけでいいじゃないか、とも思う。

石川は、「つてことは……」と少し自信なげな声になって、つづけた。

「俺ら仲直りしてたんだよな、その頃はもう」

俊治は苦笑交じりに、今度ははしつかりとうなずいた。もしかしたら、金魚すくいの話は石川の願望が生んだ記憶違いなのかもしれない。

オカちゃんの葬儀のあとの喧嘩は、さほど長く尾を引くことはなく、何日かするとまたいままでと変わらず遊ぶようになった。それでも、「ひとごろし」と呼ばれたことを俊治は忘れなかったし、きつと石川も俊治を「ひとごろし」と呼んだのを忘れることはできなかつたはずで、だから、二人でいるときにはお互い決してオカちゃんのことには口にしなかつた。

(重松清「その日のまえに」)

問一 傍線部㉗㉘のカタカナを漢字にせよ。

問二 傍線部①「数学の理屈で人生の割り切れなさをねじ伏せて」とはどういうことを意味しているのか。簡潔に説明せよ。

問三 傍線部②「ジェットコースター」の例は、主人公のどういう状況を説明するために用いられているのか。詳しく記せ。

問四 傍線部③「いまは、波が砂に染みる音のほうに耳の奥深くまで届く」には、俊治のどういう気持ちが表れているか。詳しく説明せよ。

問五 傍線部④「あいまにうなずいて」から傍線部⑤「今度ははしつかりとうなずいた」に変わった俊治の気持ちの変化について簡潔に説明せよ。

[ 3 ]

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(注1) おなじ帝、狩いとかしこく好みたまひけり。陸奥の国、磐手の郡より奉れる御鷹、世になくかしこかりければ、になうおぼし  
て御手鷹にしたまひけり。名をば磐手となむつけたまへりける。それを、かの道に心ありて、あづかり仕うまつりける大納言に  
あづけたまへりける、夜昼、これをあづかりて、とりかひたまふほどに、いかがしたまひけむ、そらしたまひてけり。心ぎもを  
まどはしてもとむるに、さらにえ見いせず。山々に人をやりつつもとめさすれど、さらになし。みづからも深き山に入りて、ま  
どひ歩きたまへどかひもなし。このことを奏せで、しばしもあるべけれど、二三日にあげず御覽せぬ日なし。いかがせむとて、  
内にまゐりて、御鷹のうせたるよし奏したまふ時に、帝、ものものたまはせず。聞しめしつけぬにやあらむとて、また奏したま  
ふに、おもてをのみまもらせたまうて、ものものたまはず。たいだいしとおぼしたるなりけりと、われにもあらぬ心地して、か  
しこまりていますかりて、「この御鷹の、もとむるに、侍らぬことを、いかさまにかしはべらむ。などかおほせごともたまはぬ」  
と奏したまふ時に、帝、  
④ いはで思ふぞいふにまされる

とのたまひけり。かくのみのたまはせて、こと事ものたまはざりけり。御心にいとふかひなく、惜しくおぼさるるになむありける。これをなむ、世の中の人、もとをはとかくつけける。もとはかくのみなむありける。 (『大和物語』一五二段)

〔注〕 1 おなじ帝——一五〇段にいう「ならの帝」をさしている。 2 御手鷹——御みずからの手にとまらせる鷹。

問一 傍線部①②の「かしこし」の意味の違いを説明せよ。

問二 傍線部③④の「たまふ」はそれぞれ誰に対する敬意を表しているのか。文中の語を用いて記せ。

問三 傍線部①「心ぎもをまどはしてもとむるに、さらにえ見いでず」、②「このことを奏せで、しばしもあるべけれど、二三日にあげず御覽せぬ日なし」、③「聞しめしつけぬにやあらむ」を、主語を明らかにして現代語に訳せ。

問四 傍線部④に関して、『大和物語』とほぼ同じ頃に成立した『古今和歌六帖』に「心には下行く水のわきかへりいほで思ふぞいふにまされる」とある。この和歌を現代語に訳せ。また『大和物語』の作者は、傍線部④とこの和歌との関係をどのように考えているのか。本文に則して説明せよ。

[4]

次の文章は、魏の明帝の青龍二年（三三四）、魏の將軍の司馬懿と、五丈原を拠点としていた蜀の諸葛亮とが渭水の南で対峙したときのことを記したものである。これを読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で、送りがなを省いたところがある。）

司馬懿與諸葛亮相守百餘日、亮數挑戰。懿不出。亮乃遺懿巾（注1）

幘婦人之服。懿怒、上表請戰。帝使衛尉辛毗杖節爲軍師以（注4）

制之。護軍姜維謂亮曰、「辛佐治杖節而致賊不復出矣。」亮曰、（注5）

「彼本無戰情。所以固請戰者、以示武於其衆耳。將在軍、君命（注6）

有所不受。苟能制吾、豈千里而請戰邪。」（注7）

亮遣使者至懿軍。懿問其寢食及事之煩簡、不問戎事。使者對（注8）

曰、「諸葛公夙興夜寐、罰二十以上、皆親覽焉。所噉食、不至數（注9）

升。」懿告人曰、「諸葛孔明、食少事煩、其能久乎。」

〔注〕 1 巾幘—女性用の髪飾り。 2 上表—上書する。 3 衛尉—宮門の警護役。 4 杖節—勅使とする。

5 護軍—蜀の武官の名称。 6 佐治—辛毗あきなの字。 7 罰二十以上—杖で二十以上打つ軽い罰。

8 噉—「啖」と同じ。食うこと。 9 數升—わが国の三、四合にあたる。

問一 傍線部①「亮乃遺懿巾幘婦人之服」にある諸葛亮の意図を簡潔に説明せよ。

問二 傍線部②「制之」③「制吾」の「制」の意味の違いを説明せよ。

問三 傍線部④「賊不復出矣」⑤「示武於其衆耳」を書き下し文にあらため、漢字にはふりがなをつけよ。

問四 傍線部⑥「千里」は、司馬懿のどのような行為を指しているのか。簡潔に説明せよ。

問五 傍線部⑦「懿問其寢食及事之煩簡、不問戎事」について、(1)司馬懿はなぜこのように問うたのか、(2)その答えを聞いて、ど

のような判断を下したのか。それぞれを簡潔に説明せよ。